

## ロバート・バトラー博士を偲んで

## 金田一郎

Ichiro Kameda

財団法人日本社会福祉弘済会理事長

バトラー教授が亡くなられたと聞いたとき、いつもお元気で笑顔を絶やされず、しかも超多忙なかで、健康には特に気をつけておられたことを知っているだけに、私の脳裏に衝撃が走った。私の知るバトラー博士の健康法は、よい家庭をもつこと、また歩くこと、旅行の際にはホテルのプールで水泳、タバコは吸わず、アルコールも最小限にと、以前に対談をお願いしたときに話されたことであった。わが国の高齢者の生きがい対策を強力に推進するため、平成元年に策定された政府のゴールドプランによって誕生した財団法人長寿社会開発センターの初代理事長になった私にとって、バトラー博士の理論は、この計画を進めるうえで強力なバックボーンとなった。

当時、アメリカの代表的な福祉関係団体を訪問して、高齢者やボランティアの問題について質問し意見交換したことがある。その際アメリカ側

から、プロダクティブ・エイジングという言葉がよく出てきた。この用語の意味や背景を詳しく知ったのは、その後間もなく、ILC-Japanの役員になってからである。

平成7年9月に、世界高齢者団体連盟IFAの第2回世界会議が、イスラエルのエルサレムで開催され、私も出席した。開会式直後には、バトラー博士の「グローバル・エイジング」と題する基調講演が行われた。その前日に、私はバトラー博士とお会いした。飛行機が遅れて、私達一行がその日の早朝にエルサレムへ着いたことを知っておられたらしい。首を横に傾け、その下に手を添えて、「お疲れでしょうから、明日の私の講演のときには、ゆっくり眠っていて下さい」と笑いながら冗談を言われた。

本当に親しみやすい人柄の方であった。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



1995年、IFA第2回世界大会(イスラエル)で発表する筆者